

南島の民間説話研究の当面する一、三の諸問題

山 下 欣 一

ついて調査した松浪久子氏は「三七話を整理・集成して、その話型整理案を提示している。これによると、まず、第一に由来話がその中心としてあげられる。そのうちでも年中行事、信仰の由来に重点があるとしている。その項目を示せば次のようになる。

(1) 年中行事・信仰の由来

(2) 地名・場所の由来

(3) 人間・英雄の物語

(4) ものの由来

(5) 動物由来

(6) その他

(7) 異類婚姻 (8) 繼子話 (9) 知恵の働き (10) 笑話 (11) 世間話

このように由来話形式への傾斜がまず第一に南島の民間説話の特色として指摘できよう。そして、これらの由来話が起源説話としての性格を持ちながら、シマの起源、人類の起源などを説く話群をも含んでいる。このことは、著しく「民間神話」として規定できる話群へと接近した形式を示すことになる。

民間説話の研究において、神話、伝説、昔話の三分類の概念規定については、ほぼ、その厳密な区分は意味のないものとして理解されているのが現状であるが、わが南島においての民間説話の存在形式の実態はどうであるかについて検討してみることにしよう。

この検討のために最近発表された与那国島の昔話の事例群についてみてみよう。わが国南島の南端に位置する与那国島の民間説話に古八重山諸島にも分布するものである。

（1）

このうち「山神と童子」をあげてみると、奄美大島大和村大和浜では、この話が A T 460 B に相当する話として話されている。すなわち「一人の少年が多くの質問を隣村の高名な占者にしてくるようになればれる。その少年は旅に出る。途中に蛇が竜になるためにいる。蛇が竜になる方法を聞いてくるように頼む。その少年は、質問の答えを持ち帰り、蛇にも教えて竜にするという」内容の話である。このような存在形式を示す話群を「山神と童子」の話群に包含して検討してみると、わが南島の民間説話がそのほとんどが由来話としての傾斜を持つにもかかわらず、また、場所を違えると昔話としての存在を示す場合もある、ということが確認できると思うのである。幸いにも岩瀬博氏の「南島昔話の異質性——「山神と童子」小考」という論文は、この問題について検討するための手がかりを提供しているのであるが、はからずも、与那国島の昔話の分類案を一読すれば理解できるように、この「山神と童子」の話の構成に清明とトブンコが登場し、清明祭の由来として話されているのである。また、この与那国島の昔話には「与那国祭りの由来」という注目すべき話がある。宮古諸島、八重山諸島では祭りの由来がその島の起源説話と結びつく傾向を示すのであるから、この話もその起源説話の一類型と考えていいものであろう。ただし、共通語でもって採録されたために若干意味不明の箇所があつて、その由来話が不明確であるのは残念である。

このようにみると南島における民間説話が多様な存在形式をとつて話されており、それらが由来話としての構成をもつて多く話される点にその特色を認めることができる。従つて、まず第一に南島の民間説話の存在形式について、神話、伝説、昔話として三分類によつて、検討するよりも、民間説話として広義に把握する

必要がある点と、次に、これらのわが南島の民間説話がこのようないく民衆説話の社会的機能とその受容され、伝承されていく民俗社会の検討へと進まなければならないということなのである。そして、主として琉球王府の編纂による正史類にも、このような説話群が由来話として記録されているのである。最近、このことについての島尻勝太郎氏の問題提起もあり、これまた今後の研究課題である。⁽³⁾すくなくとも、近世における琉球王府の編史官の体系的な正史類の編纂に当つても、このように由来話を重視したという点において、ここに事例としてあげた与那国島における民間説話の存在形式と由来話への著しい傾斜とは、決して、無縁ではないと考えられるのである。

そして、また、この問題に関連して、馬淵東一氏が『思想』(六五一号)における増田義郎氏との対談で指摘したように、琉球王府の正史編纂の刊行された時代的背景と琉球各地の口碑類を集成した『遺老説伝』の編纂が一七〇〇年の前半であつて、これがグリム兄弟の業績よりも半世紀も早いことそしてその編纂の趣旨の問題などについても今後注目し検討すべき課題であろうかと思うのである。⁽⁴⁾

二

宮古島本島の西南に近接する来間島の島建で説話がこれまで最近発表されている。

この要旨は、次のとおりである。

①宮古本島の川満のキサマ按司に美しい一人娘がいた。あまり美し

いので母がいつもついていた。

②いつもなしに、この娘が妊娠した。三ヶ月子が生まれず、三年目にお腹が痛くなつて苦しみ始め、十三日目に大きな卵を三個生んだ。

③これは人間でない化物だからだと煙の雑草を積んである真中に埋めておいた。

④三日目に煙の見廻りをしていたキサマ按司に「おじい おじい」「主、主」と呼んでいるのがいる。みると大きな三人の男の子がいた。それで家へ連れて帰った。

⑤この三人兄弟は大食漢で長男が一日七升、次男が五升、三男が三升食べていたので困り、与那覇のシル豊見親のところへやつた。

⑥シル豊見親も養いきれないで、来間島へとやる。

⑦来間島へ三人兄弟が渡ってきた時にはスムリヤーという所に九十歳になる老婆が一人だけ住んでいた。

⑧三人兄弟は苦心してこの老婆をさがし、無人島になつた理由として、毎年やつて来た來間豊年祭りを止めたところ、ナガビシとい

う千瀬から大きな赤牛がきて、来間の人間を全部ひっかけてナガビシへつれていつてしまつたという話を老婆から聞く。

⑨その赤牛の出てくるガンヌ御嶽の北の方の四つ路へ三人兄弟が行くと、天にもとどかんほどの赤牛が飛んで出て來た。

⑩三男が片角、次男が片角をつかみ、長男が角二つをつかまえて、がら、抜かれた角から血をたらし、逃げていった。

⑪その翌朝、まず三男が赤牛の血のあとをたどり、千瀬を通つて、海の底へ行つてみる。

⑫海の底は陸上で、家の門番をして糸を巻いている娘に会う。そし

て、その家の主人が片耳を抜かれて、そこから血をふき出して痛いといつて、寝こんで起きようしないということを聞く。

⑬三男は、長男と次男とを連れてきて、その家に行つてみると、そこにはすごく立派に光り、輝やいた家が三軒あつた。一軒は倉庫一軒は神の住い、あとの一軒には雜多なものがおいてあつた。

⑭その娘の案内で神に会うと、顔は血だらけ、髪もばらばらで、ひじとひざではつて出てきた。三人兄弟は来間の豊年祭りをキノエウマとキノエヒツジにすることを約束して、その娘をつれると来間島へもどつてきた。

⑮その娘は、その老婆の娘であったそうだ。赤牛につれられていた人々は目をハングづけにしてあるので役にたたないということを海底においてきた。

⑯長男はその娘を嫁にし、生まれた子を次男、三男の嫁にし、この三軒で豊年祭りをするようになつた。来間島では人間も全部育つようになつたのである。⁽⁵⁾

以上のようにより要約できるこの話は、島建ての説話として、南島に広く分布する類型に属するものであり、民間神話としても規定できるものなのである。この来間島の島建て説話を具体的な事例として若干の検討を試みてみることにしよう。

四

来間島の祭祀組織に関する報告によれば、この島における祭祀組織は次のようになる。

(イ) 女司祭者制度(ツカサ、ユーベス)

来間島には、アガリノウタキ、イリノウタキ、カアノウタキの

三つの御獄があり、この御獄での村御願の中心になるのが女性

神役である。

(2) 里神集団

サトと呼ばれている一区画を中心とする地縁的な神に対する信
仰集団である。

(3) 儀礼集団ブナカ

来間島には、ウブヤーブナカ、スムリヤーブナカ、ヤーマスヤー
ブナカという儀礼集団があり、来間島の三軒の宗家であるスム
リヤー、ヤーマスヤー、ウブヤーのどれかに各家は帰属するこ
とになる。ブナカの儀礼はヤーマスウガンといい毎年八、九月
頃のキノエウマの日に行なわれる。この日には生児と結婚した
男子のブナカへの加入礼がある。これらの前者をマスマトイと呼
び、後者をマスピアという。この日の儀礼には、ブナカのサス
が中心になつてサラビアースという神歌(ニーアイリ)をうたい、
みなが声を合わせてうたい、酒をまわし飲む。この神歌は非常
に長く、二時間ほど必要とする。⁽⁶⁾

つてゐる点を注目すべきであろう。

五

また、この来間島の島建て説話の儀礼的機能とともに、民間説話
としての構成要素を検討してみる時、次のような話群に気づくこと
ができる。これを提示してみよう。

(1) 卵生要素

この卵生要素については、『宮古史伝』に、次のような記載がある。

この家の下女が夜野原に寝ていたが異様の物音が雷の如くあば
れ回った。まもなく、下女は原に出ると産氣づき十二個の卵を
生み、これを枯葉の下に埋めておいた。ほどなく下女が原に出
ると「母上、母上」と呼び、下女にすがりついた。子どもたち
は成人して十二方の神となつた。この母をネノハマテダといい
天の神になつた。子の神々は池間御嶽、赤崎御嶽、阿津真間御
嶽、赤崎宮、美真瑠御嶽に奉祀され諸人の崇敬を受けている。⁽⁸⁾

(2) 牛の問題

来間島の島建て説話では、海底の神は赤い牡牛の形で出現して
いる。これらの宮古諸島における類話について、これを要約し
て示すと次のとおりである。

① 住屋御嶽の由来譚として、繼母のいいつけで食わず芋の葉を摘
もうとしてアブ(洞)に落ちた子どもが、途中つるに足をとら
れて七日七夜苦しみ、叫びつづけていた。父がこれをみて、つ
るを切つて子どもを落した。子どもはネイリヤの國アロウの國
に落ちて行き、七匹の赤牛によつて試される。そして、この世

行き人を救えと指示され、赤牛に守られ、火をともしてネイリヤの国から、この世の境に出て、住屋山に入ったという話が伝えられている。⁽⁹⁾

②来間島の北にある下地島では「オキコダのニガタイ」があり、

牛と悪疫の流行が話されている。⁽¹⁰⁾

③下地島では、また、村の祭りを中止させたところ、大牛が現わ

れ子ども一人を残し村人を殺した。そこに大力の兄弟がきて、大牛を傷つけた。血のあとをたどっていくとツカサの家であつた。その家の娘に聞くと父が怪我して寝ているという。兄弟は祭りの復活を約束し、牛に殺された村人は生き返る。⁽¹¹⁾

④下地島に敵が押し寄せてきたことがある。ミルクガマから赤い小牛が現われて、敵をすべてミルクガマの中へ入れ、全滅させた。⁽¹²⁾

以上のような事例群をあげてみたが、このような事例群からみて、南島では各シマ、島のような局地的な発祥説話を民間神話として保持していたのではないかと考えられるのであり、また、来間島の島建で説話をみられるような他界のシンボルとしての牛の問題などについても、視点を南島全域に及ぼしてみると、濃厚に分布している牛を供儀する祭儀などとも関連させながら検討してみる必要がある。すくなくとも、奄美では、この宮古諸島の事例に関連するような民間説話群と事例を提示できるのである。

六

次に注目すべきは巫女の呪詞としての古歌謡群であり、この叙事的的部分と民間説話の関係も今後解明すべき問題である。

さらには、現在、整理・集成の進展中である沖縄、先島諸島の民間説話全般について日本本土との比較も現在当面する急務であろう。その他にも多くの問題をあげることができるが、それらはまた別の機会に譲ることにしたい。

七

以上簡単に南島の民間説話の調査研究の現状と最近発表された与那国島の昔話の分類案を提示しつつ南島における民間説話の様態について検討し、さらに、宮古・来間島の島建で説話の事例から、若干の考察を行なつたのである。この試みは、南島の民間説話の存在形式の特質とその研究を進める上における諸問題を要約することになった。一般的な問題としては、日本本土と同一の基盤を持ちつつの民間説話の存在形式については言及できなかつたが、これらも、重要な問題であることは当然である。

この小論において強調したいと考えるのは、以上瞥見したような南島の民間説話の様態に対し、より広い立場すなわち基層的な文化という見地からのアプローチが南島の民間説話の研究の方法には要請されているという点である。

このような認識によつて、南島の民間説話研究の当面する諸問題の解明への進展が展望可能であると確信するものである。

(1) 松浪久子、一九七八、「与那国昔話話型一覧」、『奄美沖縄民間文芸研究』創刊号、奄美沖縄民間文芸研究会一頁～二八頁
(2) 岩瀬博、一九七八「南島昔話の異質性」「山神と童子」小考」『奄

『美沖縄民間文芸研究』創刊号 奄美沖縄民間文芸研究会 二頁～五

頁

- (3) 島尻勝太郎 一九七七 「沖縄民話の特質」『沖縄民話の会会報』三号 沖縄民話の会 八頁～一五頁
- (4) 馬渕東一、増田義郎 一九七八 「△対談△ 民族・社会・歴史」『思想』9・651号 岩波書店、三九頁
- (5) 下地利幸 一九七七「来間島建由来」『沖縄民話の会会報』3号 沖縄民話の会 二十頁～三二頁
- 遠藤庄治 一九七七 「琉球の宗教儀礼と日本神話」『日本神話と琉球』有精堂 一二三頁～一三八頁
- (6) 牛島巖 一九七一 「琉球宮古諸島の祭祀構造研究の問題点」『沖縄文化論叢3』平凡社 三二二頁～三四四頁(初出は一九六九年『史潮』一〇六号)
- 植松明石 一九七一 「先島の御嶽をめぐって」『沖縄文化論叢3』平凡社 三〇七頁～三二一頁(初出は一九六二『日本民俗学会報』二四)
- (7) 遠藤 一九七七 「前掲論文」一四五頁～一四六頁
- (8) 慶世村恒任 一九七六 『宮古史伝』(自家版 初版一九七二年)一一頁～一二頁
- (9) 慶世村 一九七六 『前掲書』一六頁～一八頁
- (10) 遠藤 一九七七「前掲論文」一三七頁～一三八頁
- (11) 遠藤 一九七七「前掲論文」一四一頁
- (12) 遠藤 一九七七「前掲論文」一三九頁
- また、大林太良 一九七二 「琉球神話と周囲諸民族神話との比較」『沖縄の民族学的研究—民俗社会と世界像』 日本民族学振興会 三〇三頁～四一九頁も参照。

(やました きんじら)